
空想ダイブ2 ～短編集～

kazuya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空想ダイブ2〜短編集〜

【Nコード】

N2922D

【作者名】

k a z u y a

【あらすじ】

短編集です。よろしければ読んでください。

冬の海（前書き）

作者が空想にダイブして生まれた作品たちです！
（つまりただ空想をめぐらしていただけです）

冬の海

「何してんだよ、こんなところで」

僕の背中に声が当たった。シーズンをかなり過ぎたこの海岸に僕はいる。僕はひとりになりたかったからこうしているのに誰なんだろう。ふりかえるとスーツを着たサラリーマンがいた。いや、これは僕の印象だからサラリーマンかどうかはわからないのだけれど。歳はいくつくらいだろうか、20代後半？いや、30はこえてるか。

「どうせ将来に不安抱えて自分はどうすべきなんだろうとか考えているんだろう」

「う・・・・・・」

どうしてそれを、と言いかけたが、向こうもそれを察知したのか、「その格好と雰囲気を見ればわかる」

「あつ」

僕もスーツだった。リクルートスーツ着て冬の海で三角座りしてたら、そのくらいばれるか。

「それに、俺もそんなだったから」

冷たい風が吹いた。二人で身震いした。

僕はとてつもなく不安だった。周りの友達が就職活動を始め、同じように僕も始めて。最初は僕も社会人になるんだなあって変な感じがしたけど、そんなフワフワした感情はすぐに消え去った。あまりに自分の将来について漠然としたものしかなくて、あまり夢もなくて、何も考えず学生生活を送っていたから焦燥感がどっと押し

寄せてきた。最近は考えすぎて落ち込んだり、悩みすぎて「もうどうでもいいや」って投げやりになったり、ダメだなあ、僕は。

「俺もそんなだったけど、今はこうしてバリバリ働いてるぜ」

「はあ」としか言えなかった。僕はあなたとは違うんだろ。どこかで「この気持ちがあるにわかってたまるか」という気持ち、ある意味で敵対心に近いものがあつた。人の悩みをそんなに軽く見てほしくない。もうひとりにしてほしいな、誰なんだよ、この人は。

波が寄せて引いてを繰り返すことに空は暗くなってくる。そして温度も下がる。

「早く家に帰れよ、風邪ひくぞ」

「はい。なんかすいません、ろくに言葉も返さないで」

「俺が勝手に君の領域に入ったんだから、別にそんなこと気にしなくてもいいよ。ただ昔の俺みたいで気になってさ、この冬の海は俺のものだったんだぜ、その三角座りも」

「じゃあ先輩ですね」

「まあ、そんなところかな。あつ忘れてた、ホレ」

彼は僕に缶コーヒーをなげた。キャッチするととても温かった。

「とにかく風邪ひくから早く帰れ」

「はい、コーヒーありがとうございました」

たったひとつの缶コーヒーで僕の彼に対する敵対心は和らいだ。僕はもしかしたら単純な人間なのかもしれない。

「まあ、がんばれ。そしてがんばりすぎるな」

「はい」

このサラリーマンと出会って僕は変わった。つと言えはドラマチックであるが、実際そんなことはなく会った前と後では何も変化はなかった。結局また自分に迷い、悩みながら就職活動が続けるのだ。それもそうだ、あのサラリーマンと数回言葉を交わしただけで、この大きな壁を越えることなんて到底できないのだ。

「はい、ありがとうございます。お返事お待ちしております」

携帯を切って、エンジンをかける。会社のロゴがはいった車を運転するのにも慣れた。はじめは少し恥ずかしい気もしたが、そんなものはすぐに慣れた。お世辞にも大企業とはいえないが、一応会社に入社することができ、営業に毎日忙しい。自分のなりたいものなんて結局わからなかった。でも仕事というもの、自分に何かを任せてもらえるということで学生時代の自分よりも生活にハリが出ていくような気がする。間違いなく今いるこの場所が僕の居場所なんだと思う。それでいい。

懐かしい景色の中を走っていた。あの海にリクルートスーツの迷い人がいた。やっと、あのときのサラリーマンの気持ちがあったような気がした。

車を止めて、砂浜を歩いていく。風邪はやはり冷たい。「そうだ」ふと思つてきた道を引き返し、自販機で缶コーヒーを買う。ゴトツと缶が吐き出され、取り出し口に手を入れ、それを取り出す。たぶん僕はあの迷い人に最初にこう言っただと思う。理由なんてわかってるくせにと心の中で苦笑いをした。

「何してんだよ、こんなところで」

テレビ

冷蔵庫からビールを取り出す。

袋からコンビニ弁当を取り出す。

テレビをつける。

ボロアパートでの生活はもうパターン化されている。そろそろ引越そうかなとも思うが金銭面、さまざまな面倒によりその考えを捨てざるをえない。どうしてここへ来たのかというと単に家賃が安いということだった。それも破格の安さ。絶対にいわくつき物件だと思ったが住んでみるとそうでもなかった。当たり前だ、幽霊など存在しないのだ。それどころかテレビも備え付けられていた。家電付というわけではない、あくまでテレビのみであった。

今日もパターンどおりテレビをつけると何やらCMが放送されていた。最近は何のCMかわからないCMが多い気がする。続きはwebで、というも多い。こういうCMを見ていると世間一般から取り残されている気がする。また歳をとったかと少し悲しくもなる。

いきなりピーという音がしてテレビの映像が乱れた。ついに故障かと思った。始めから部屋とセットになっていたから何年使われているのかはわからないが年季が入っているのは見てわかった。しかし一度も壊れたことがなかったし、見る分には何の支障もなかった。映像が乱れたのはじめてだった。

音が止むと、ぱっとクリアな画面に戻り、美しい女性の顔が映し出された。CMの続きか、と思ったがその画が動かなかった。なん

だろうとしばらく見ていると、その女性が微笑み、それと同時に右下に数字が表示された。

9
9

その数字からカウントダウンが始まった。

9
5
9
4

減っていくのはわかるが、それがどういう意味かはわからなかった。ただ数字が減るたびに少しずつ女性の口角が上がっていくのがわかった。

8
3
8
2

まあいいかと弁当を食べ始める。

さらに数字が減っていくと女性の口角が上がるとともに目の辺りが邪悪に歪みはじめた。

さすがに気持ち悪くなってリモコンを取り、チャンネルを変えようとしたが変わらない。電池切れか。仕方ないので少し面倒だがテレビ自体についているボタンを押した。しかしチャンネルは変わらない。その間も女性の顔は歪んでいく。電源もやっぱり消えない。

5
1
5
0

なんだか本当に気分が悪くなってきた。食欲も失せ、水でも飲も

うと立ち上がろうとしたが体が動かなかった。

3
9

3
8

なぜ動かないんだ、どうして？

力を入れても何かにその力を吸い取られているようだった。

2
7

2
6

画面には歪みきった女性の顔、美人ではなく、もう怪物のようであつた。

そして何か声を発している。すごい早口で何か言っているがわからない。まるでテープを早回しにしたときのような高温で機械的な気味の悪さだった。

1
5

1
4

その声はもう少しで聞き取れそうだった。徐々にゆっくりになって、今度はスローモーションでよくある低音になりつつあった。それと同時に全身が重くなり意識が遠のいた。

3

2

1
「アナタモアノヨヘイクノヨ」

「この物件めちゃうくちや安いじゃん、お化けとか出たりして」

「冗談はよしてくださいよ、お客さん。かなり古いアパートだから安いですよ」

「まあ、俺はそんなこと気にしないけどね、幽霊なんているわけないじゃん」

「それじゃあ、この物件でよろしいですか？」

「オッケー、オッケー。今の俺には安いに越したことないし」

「ありがとうございます。それにこの部屋ならテレビもついてますよ」

教会にて

「僕は一体どうすればいいのですか」

正面のキリストに向かって言ってみる。特に竪屏にしている宗教などない。ここへ来たのは行動範囲内だったからで、それ以上の意味はない。ただ単にすがりたいものを探していた僕にとっては教会でも寺社でもどちらでも良かった。現実と少し離れた空間が僕には必要だったのだ。

とりあえず僕の思いをこの静まり返った場所で声にしてみたのだけれど予想どおり何の返答もなかった。おそらく信者にとってキリストは偉大なのだろう。ただそれ以外のものにとっては架空、伝説なのであり、もっと現実的に言えば、単なる絵でしかないのだ。その絵に向かって真剣に答えを求めようとしているのだから、僕も来るところまで来てしまったのだなと感じる。そう考えるとひどく自己嫌悪を覚えて、とりあえず出ていこうと考えた。たとえここで浄化されたとしても一歩外を出ればむせ返る現実が待っているのだ。そう考えるとひどく憂鬱に思えて扉の方へ向かう足も重く感じられた。

そのとき、

扉に手を掛けようとしたまさにその時に天からの声が聞こえた。

「どうかなされたのですか」

それは天からの声ではなく女の声だった。シスターか、と思ったがそうではないようだった。いや、決め付けるのは早い。その格好をしていないだけかもしれない。女は霞んだ色のワンピースを着ていたが、よくあるシスターの格好ではない。

「あなたは？」

そう尋ねると、女は「私はここに通っているものです」と答えた。

「クリスチャンなんですね」

「それはそうですよ」

女は当たり前でしょと付け加えそうな感じで答えた。僕は女の奥に見える単なる絵をちらっとみて、「それはそうでしょうね」と答えた。

「ということはあなたは違うのね」

話し込んでいる暇はあるが、そういう気分ではない。僕は「では」という意味をこめて頭を下げた、すぐに出ていくつもりだった。

「待つて」

「どうかしましたか」

「あなた深刻そうな顔をしている」

「そういう顔ですから」

「良かったら話を聞かせて、そういう顔になった理由を」

よっぽど暇なのか、それとも僕を見て不憫に思ったのだろうか。

「僕の不幸自慢でよろしければ」

僕はそういつて扉の取手から手を外した。

「あなた人を信じていないでしょう、いえ、現実を全て疑ってかかっている」

不幸自慢を一通り話し終えた後に女はそういった。

「ごもつともです」

だからここへ来たんだ、そうでなければこんなところには。

「信じなければ未来は変わらない」

「そんなこと知っている、でもあなたの想像以上に今の僕には難しい」

「それはそうかもしれないけど」

二人とも目を逸らしてため息を吐いた。

「すいませんでした、暗い話をしてしまつて。そろそろおいとまします。それじゃあ」

また僕は扉に向かっていく。

「待つて」

「またですか、一つ言っておきます、慰めの言葉はいりません。きっといいことあるとか頑張っとかいりませんから」

「いえ、そうじゃなくてこれを」

女はキーホルダーを取り出した。青い丸い玉が三つ並んだものだった。

「なんですか、それは」

「これは私たちクリスチャンにとってはお守りみたいなものです、かつてのキリストが」

「もういいです、そんな話は」

「わかってます、あなたはクリスチャンではない。私が言いたいのはせめてこのキーホルダーを信じてほしいと言っことです」

「また何を」

「このキーホルダーだけでも信じてほしいのです。一種の暗示です。あなたはきっとしばらくの間何も信じていけないでしょう」

「そうですね」

「ここへ来たのも何も信じてできなかったからなのでしょう。ここは騙されたと思って」

女はキーホルダーを差し出した。僕は女に向かって歩きだした。そして女の目を見てそれを受け取った。

「騙されたと思って、か」

僕は少し微笑んで女に頭を下げ、また扉へ向かっていった。外はやはり現実である。キーホルダーはこの教会と外の世界をつなぐ唯一のものである気がした。そして取っ手に手をかけたとき、またしても女の声がした。

「待って」

振り返ると女が手を差し伸べていた。

そして言葉を発した。

「そのキーホルダー、5万円になります」

僕は一体どうすればいいのですか

先生さようなら

私が担任したクラスは夏休みを前に私の担任するクラスではなくなつた。

担任という言葉も間違っているのかもしれない。ただこどもたちの中に埋もれていただけだった。私のクラスはめっちゃくちゃだった。授業中にじっとしてられないのは当たり前で、すぐに遊んだり大声で笑ったりする。子供は本来こうあるべきなのだ、自由に動き回ればいい。ただここは学校で、授業中で、教育者としての立場を持てばそれは許されないことであり、もちろん私は注意をする。しかしこどもたちは聞かないし、その注意だけで時間が終わってしまう。そして保護者からの苦情、上司からの注意、私は散々に参っていた。これ以上続けるともう体が持たない。

そして教師そのものをやめることを決意した。

6月に入つたくらいに他の先生に相談してみた。私の疲れ果てた姿をずつと見ていたからかもしれない、誰も私を引きとめようとはしなかった。むしろ、私の後につきそうな先生を逆に心配した。教頭は少し違う意見をした。『君がつらいのはわかる、でも君はこの教師という仕事に憧れていたんじゃないか。その憧れの場所に立つたのにこんなことでそれをすべて消してしまつてもいいのか』と私に言った。「こんなこと」という部分に少し腹が立ったが、そんなことより、上辺で良いことをいって内心は学校と言う組織への懸念を考えているのだろう。こういう教師がいる学校はダメだとかレツテルを貼られるのが嫌なだけだろう。私はすぐにやめるつもりであったが、教頭との話し合いの末、最低夏休みに入るまで、つまり一学期は教師、クラス担任を続けるということになった。まだこんな

ところにいるのかと思うとやはり気分は優れないがトンネルの出口は見えているということでなんとなく楽な気持ちにもなれた。

それは私にとっては重大なことであつたのだけれど、その後もクラス内の日常は変わらなかつた。授業が始まる前にわたしはきちんとこどもたちに告げた。

「先生は事情でこの学校を辞めることになりました。残り少ないけどよろしく。」

ざわざわした様子が一瞬止まって私はびっくりした。もしかして少し悲しい気持ちになってくれたのかと思つたが、その考えは一瞬で崩れた。

「先生どこ行くの？」

「事情つて何？」

またざわざわし始めた。

「なんで？」「どうして？」は悲しみではなくただ単なる好奇心からのものであることはすぐにわかつた。そしてその無邪気な質問に何も答えず私は教科書をめくり淡々と言ひ放つた。

「じゃあ前の続きから」

もちろんおとなしくなることはなくいつもと同じに戻つた。

「なんで教えてくれへんの？」

またざわざわしはじめた。

「静かに。授業に集中してよ」

一応注意したがたぶん後ろの席の子には聞こえてなかったような気がする。もうどうでも良くなっていた。

「さようなら」とみんな声を揃えて言う。クラスがひとつになるのは一日のうちでたった2、3秒、このときだけだ。そしてその瞬間がおわると波が引くように子供たちは去っていく。私は毎日なにをしているんだろう。そう考える暇もなく、宿題の採点をする。教室にある私の机はかなり散らかっている。そのことを指摘してくるこどももいた。確かにこんな机をみせることは教育上悪いがこの教室内では教育そのものが成立していない。いったい昔と今で何が変わったんだろうか。そんなに大きく変わることがあっただろうか。

私の時代には先生のお仕置きを食らう少数がいたが、今ではその少数が当たり前になり、さらに保護者やPTAという負担が伴う。あまり考えすぎるとよくない。私は採点に集中する。そしていつものように感じるのだ。こどもたちは授業中はざわざわしているが勉強は比較的出来るのだ、それは塾の存在があるからだ。そんなことずつと前から知っている。もうみんな塾を学校にすればいい、学校なんてなくしてしまえばいい、極端な想像が頭を回っていた。

「先生、やめるんか？」

その言葉でわれに返った。その言葉はクラスの中でも特に落ち着きがなくなざわざわの中心のような男の子だった。

「どうしたん？」

どう言葉を返していいのかわからず、よくわからない返事を私はした。すると、私の机の一番近くの席に来て、ランドセルをおろし、座った。

「どうしたん？」

また同じことを聞いてしまった。でもそれは本心からだった。本当にどうしたんだろうと思ったからだ。

「俺な、国語の授業好きやってん」

「そう、ありがとう、先生、嬉しいわ」

「いや、先生は好きちゃうで。授業が好きなだけや」

顔を真っ赤にして「授業が」を強調して言う姿は微笑ましかった。

「なんや、そう。ちょっと残念やな」

「いや、別に先生も嫌いちゃうけど、いや、その……………」

変な空気になったので、私は茶化すように言った。

「もう、別にええよ、でもなんで国語好きなん？」

「俺、漢字が好きやねん」

「へえ、意外やなあ」

「難しい漢字もめっちゃ知ってるで」

「例えば、どんなん？」

そこから私と彼の漢字談議が始まった。私も彼と同じく国語が好きだった、というのも私が教師を目指したのは高校のときの国語の先生がきっかけだった。高校生の頃、引っ込み思案でありクラスになじめなかった私の心のよりどころがその国語の先生だった。ク

ラスの担任の先生より話をしたと思う。国語の授業について、最近読んだ本について、進路について、単なる世間話、いろいろと話した。私は先生のような教師になろうと思った。教頭のいうように憧れを持っていた。私が教師になりたいと言つとその先生は喜んでくれ、そしてこう言つた。

『教師しててよかったと思うことなんか年に二日、三日あつたら良い方だな、それだけは覚えときや。でもその二日、三日で何百日の嫌なことを忘れることができる、これも覚えときや』

ごめん、先生。

「先生、どうしたん？」

「え、うん、何でもない」

ノートにはいろんな漢字がびっしり書き込まれている。二人で漢字ゲームをしていた途中だった。古い記憶を思い出していた。

「じゃあ次は『さんずい』の漢字いくで」

「よっしゃ、今度は俺が勝つで」

ひとつの部首についていくつ漢字を書けるかというゲーム。この子ぐらいの時代にこのゲームをした記憶がある。彼が本当に小学生では書けそうもない漢字を書くものだから、このゲームに誘ってみた。結果は私が全勝。そうでないはずだから、まあ良かった。

「先生、ほんまにやめるん？」

「うん、そうや、やめるんよ。でも私がやめても国語の授業は無
くならんから安心しとき」

「うん……漢字ゲームおもしろかった、またしよな」

「うん、またしよな」

最終下校の音楽が流れ始める。いつもより物悲しく感じられた。
彼を見送って、宿題の採点を再開する。参ったな、今日は遅くまで
かかりそうだ。でも今日は年に三日くらいのいい日だったのだろう
と思う。

その後、私が学校を去る日まで、何も変わらない日が続いた。彼
とその後何度か漢字ゲームをした。しかし特別仲良くなったわけ
もなく日常はあまり変わらなかった。そして最後の日が来た。

「もうみんな知ってると思うけど、先生はこの学校をやめます。
短い間やったけどありがとうね」

涙は全く出なかった。私はこうなることを望んでいたからだ。こ
どもたちも誰も泣いていなかった。すると学級委員が立ち上がり、
私に花束を持ってきた。そして台詞口調で「今までありがとうござ
いました」と言い、みんなも「ありがとうございました」とつぶい
た。さすがに泣かないとまずいと思ったが泣けそうもない。ちら
っとみんなのほうを見ると、あの彼がいないことに気づいた。そう
いえば、今日は欠席だったな。朝、電話が来ていた。夏風邪をひい
たとか言ってたな。なんだか少し残念だったけど、まあいいか、仕
方ない。学級委員は続けて私に色紙を渡した。いわゆる寄せ書きだ
った。中心に「先生ありがとう」と書いてあり、その周りに円にな
るように言葉が刻まれている。「ありがとう」私は精一杯心を込め
て言ったがやはり涙は出なかった。

職員室での荷物の整理を終え、お世話になった先生方に挨拶をし、私はこの学校を去った。同時に教師という職からも去った。

帰りの電車の中、乗客はかなり少なくなった。私が乗った車両には私と疲れたサラリーマン一人だけになった。そうだ、せつかくだし、寄せ書きを読もうと思った。クラスの中で読むものなんか癪だったし、職員室で、というのも気が引けたので、きちんと読んでいなかった。こどもたちはなんと書いたのだろうか。

「先生、ありがとうございます。これからがんばってください」みたいな王道が多数を占めるなかで異様な輝きを放つ二文字があった。

薔薇

普通の文字の3倍くらいのスペースを使って大きくそう書かれていた。とてもバランスが悪い二文字。

「俺、漢字が好きやねん」

「難しい漢字もめっちゃ知ってるで」

その台詞が脳裏によみがえった途端、その二文字は見えなくなつた。

薔薇ってなんやねん。

小学生でこんな字書けんの、この子くらいちゃうか。

もっと「先生ありがとう」とか、そういうの書いたらええのに。

ほんま何考えてるんやろう、この子は。

ほんま、あほやなあ。

涙というものはこんなにも出るものなのか。私は嬉しかった。ただ嬉しかった。

薔薇の花束をもらつよりずっと。

「だからさあ、何か特別な形で年越ししたいわけよ」

「なんだそれ」

「だからさあ」

さびれた公園で冴えない大学生二人がポケットに手を入れて話している。こんなところにも新しい年は来るのだ。

「ジャンプするってのはどうだ、俺らは年を飛び越えたって」

「それは使い古されているからダメだ、もっとこう特別なのはないかなあ」

テレビではカウントダウン番組が放送されているだろうし、ライブ会場ではカウントダウンライブが行われているだろうし、テーマパークではカウントダウンイベントが催されているだろうし、貴重な団欒のときを過ごしている家庭もあるだろうし、永遠の愛を誓う恋人達もいるだろうが彼らはただ考えていた。

「そうだ、写真撮ろう。3 / 2 / 1 / 0の瞬間に」

「でも俺カメラ持ってねえよ」

「携帯があるだろ」

「あっそうか」

手をコートのポケットからズボンのポケットに移し、それを取り出した。

「電源切れてるわ」

「こんなときについてないなあ」

「お前の使えばいいじゃんか」

「俺のは修理中だよ、一昨日壊れた」

「そっちのほうがついてねえよ」

受験生にとっては、深夜のコンビニバイトにとっては、疲れてすっかり眠ってしまったうっかりさんにとっては年越しというものはあまり意味のないものかもしれない。でも彼らは考えるのだ。

「もうジャンプでいいじゃん、てか寒っ」

「いや、ホントに寒くなってきたな、俺ら何やってんだよ」

「そっちが言ったんだろ、特別な年越しするって、公園に呼び出して」

「いや、あきらめちゃいけない。この年越しはこの瞬間にしか来ないんだよ」

「当たり前だよ」

大晦日から元日にかけてはちょっとスペシャルだ。電車は一晩中走っているし、小学生がちよつとくらい夜更かししたって親は注意しないし、神社は年内一の儲けをさっそく記録するし、街の空気も不思議と変わるのだが、彼らはまだ考えていた。

「やばい、時間がないぞ。どうしよう」

「もうジャンプでいいんじゃないか」

「く、悔しいが仕方ない。思いつかないから仕方ない」

「じゃあもうそれで決定な。じゃあ線ひくぞ、木の棒か何かないか」

「こんなのでいいか」

壊れて捨てられていた傘を使って公園に適当に一本線を引いた。

「よし、OKだ。こっちが今年、そっちが来年だ。3 , 2 , 1 , 0でこっちからそっちへジャンプだ」

「わかった。よくよく考えると年を飛び越えるっていうのはいいかもな」

「今頃気づいたか」

二人で公園の時計を見る。

一分前だ。

除夜の鐘がなった。

「ええ!？」

二人揃って声を上げた。

「ええ!？この時計遅れてるよ」

「越しちゃったよ、年」

「越しちゃったな、年」

「今年もこんな感じなんだろうな」

「今年もそんな感じなんだろうな」

二人は耐え切れず歯を見せて笑った。

せーので数秒遅れで年を飛び越えた。

二人は向かい合って一歩引いて背筋を伸ばして言った。

「あけましておめでとう、いざいざ、」

0708(後書き)

読んでいただいております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2922d/>

空想ダイブ2～短編集～

2010年10月11日16時56分発行